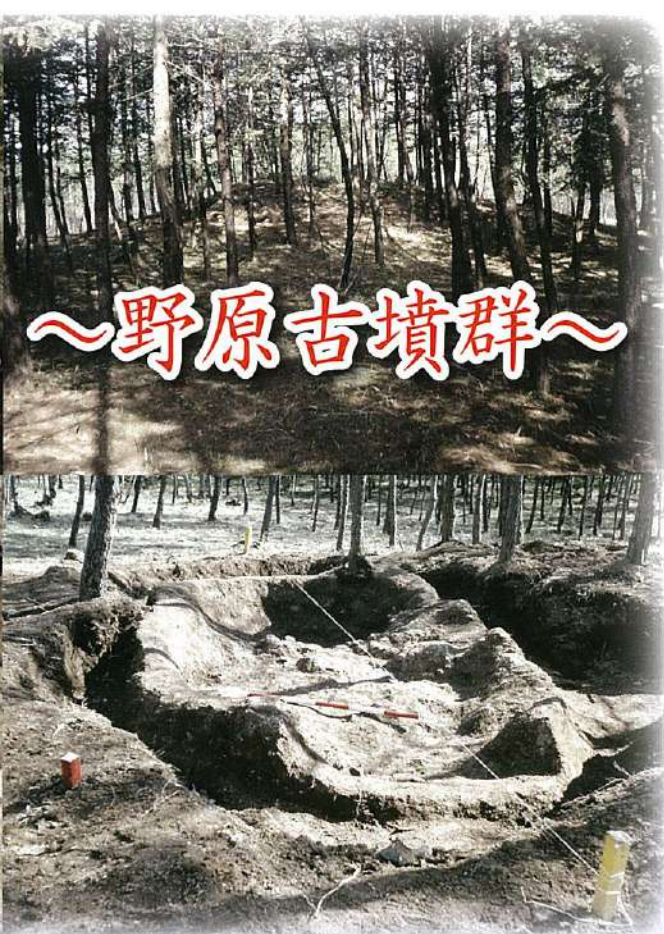


第7回特別展

群集墳の時代 ～野原古墳群～



2010
立正大学博物館

ごあいさつ

平成22年度の特別展として、「群集墳」を取り上げました。立正大学熊谷校地は埼玉県北部の江南台地上に占地しており、周囲は後期古墳群の分布が著しい地域であります。“踊る埴輪”の出土で著名な野原古墳群は至近の距離にあり、熊谷校地の開設に先立つ昭和39年には、野原古墳群中の8基が立正大学文学部考古学研究室によって発掘調査されております。

当時、関東地方にあつて後期群集墳を対象とした古墳群の調査は稀であり、先駆的な調査と評価されるものでありました。埴輪を伴う小形前方後円墳の築造を契機として30基ほどの群集墳が形成されており、群中の3～5基が特定の家族集団によって累代的に造営されたものであったことが明確となったものであります。

群集墳は小形の古墳の群集したものであり、個別古墳を取り上げれば大規模な前方後円墳として造営された在地首長墓とは比較の対象とはなりません。しかし数的には古墳の主体を占めるものであり、後・終末期の古墳文化研究には看過することのできない重要な存在と認識できるものであります。

今回の展示では、野原古墳群を含めて埼玉県を中心とする北関東地域の調査された群集墳のいくつかを取り上げ、それぞれの群集墳の個性を明らかにしたいと思います。

平成22年11月

館長 池上 悟

目次

ごあいさつ

目次

例言

- 1、群集墳研究の問題点
- 2、関東地方における群集墳の分布
- 3、野原古墳群
- 4、北関東地域の群集墳

例言

1. 本図録は、平成22年11月29日（月）～12月25日（土）に開催する第7回特別展展示図録として作成したものです。
2. 本図録は、館長池上悟の指示のもとに博物館学芸員内田勇樹が編集した。なお挿図・表については矢口翔馬（大学院修士課程）の協力を得た。
3. 本文中の挿図の一部は文末に掲げた参考文献からの転載であり、一部加筆修正を行っている。
4. 企画展開催にあたり、以下の方にご協力を頂きました。
新井端・君島勝秀・大谷徹・足立佳代・板橋稔・熊谷市教育委員会・埼玉県立さきたま史跡の博物館・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・足利市教育委員会（順不同・敬称略）

1. 群集墳研究の問題点

1

日本列島の各地に展開した古墳の総数は、約 15 万基といわれている。古墳は、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳などの多様な墳形を呈しており、このうち古墳文化を代表する存在としての前方後円墳は、僅か 3 %ほどを占めるに過ぎない。

古墳の主体をなすのは円墳であり、時期区分に従えば、前・中期ではなく後・終末期に築造された小形古墳が大半を占めている。これらの小形古墳は群集して造営されており、群集墳と呼ばれている。

群集墳は様々に内容区分されているが、出現の社会的背景を考慮すると、

- ①・竪穴系の埋葬施設を構築した 5 世紀後半から 6 世紀前半代にかけて造営された初期群集墳、
- ②・横穴式石室を構築した 6 世紀代の後期群集墳、
- ③・横穴式石室を構築した 7 世紀代の終末期群集墳、

の 3 区分が有効的であろう。

学史を回顧すれば明瞭な如くに、各地の有力者の墳墓と想定される首長墓以外の小形古墳群が研究対象となってきたのは、近藤義郎による佐良山古墳群の調査を嚆矢とする戦後の昭和 20 年代後半以降である。古墳時代後期に新たに台頭してきた新興勢力の築造した墳墓群として、出現に至る社会的背景が問題とされたものである。

研究の当初は、地域の生産力と直接的に関連する群集墳の造営が考えられたものの、その後は政治的な要因が重視され、畿内中央勢力による新興勢力の直接的な把握の結果と考えられるに至ったものである。

畿内地方における群集墳の理解としては、このような理解も可能であるが、群集墳は畿外四荒の地にも広範に展開しており、東国においては後・終末期に築造された高塚群集墳と横穴墓群が地区を分かって展開している。

古墳文化中枢の地から離れた地方における群集墳の現出現象を、畿内地域と同様に理解し得るかどうかは重要な検討課題であろう。

群集墳の研究は、総体としての様相把握を目的として開始された。一定の期間内に造営された群集墳のうち、盛行時期による類別化が果たされ、次いで密集の度合いなどが問題とされて来たところである。

畿内地域の諸例を対象とした唯一の群集墳の定義は、「群集墳とは複数の古墳造営主体が、各自限定された墓域を分割占有しながら、その内部である一定期間造墓活動を行った累積現象である」とする、昭和 53 年の広瀬和雄によるものである。

これは、群集墳は複数の等質的な造営主体による造墓活動の結果として現出するものであり、一つの典型例を明示したものとして評価されてきた。

一方、水野正好による、群集墳内に墓道を復元想定して個別造営主体が果たした造墓活動の累積状況を明確化し、造墓集団内に占める個別造営主体の優勢・劣勢状況を確認する視点も実践されてきた。

しかし、これらは総体に占める個別造営主体の墓域は群造営当初から明確化されていたという点において、極めて畿内的であった。

群集墳の群構成の検討は、個別古墳の造営時期の把握が前提となるが、古墳相互の関連性の復元には法則性は見出せない。

群集墳は、独り群集墳としてのみ存在し得るものではない。地域における在地首長墓を含めた古墳と関連して展開したものであり、古墳・古墳群間における相互の連係を考慮しなければならない。

さらには群集する小古墳群としては、一般的には古墳の表徴としての墳丘を欠如するものの、副葬品・造営期間を考慮すると、崖面に横に穴を掘って墓室とした横穴墓も研究対象となる。

地方に展開した群集墳は、各地域に等しく均一に展開してはいない。特定地域の特定地区を限って高塚群集墳および横穴墓が展開しており、それぞれ様相を異にしている。

地域首長墓との立地の差異などを考慮すると、群集墳の規模も含め出現の背景が問題となるところである。

東国の群集墳の特徴としては、高塚群集墳に匹敵する横穴墓群の展開を確認することができ、性格の異なる群集墳の集合として、各地の後・終末期古墳文化が形成された状況を想定できる。

東国の後・終末期群集墳は、各時期の群集墳の組合せから以下の類型に区分できる。

- A・初期群集墳
- B・初期群集墳＋後期群集墳
- C・初期群集墳＋後期群集墳＋終末期群集墳
- D・後期群集墳
- E・後期群集墳＋終末期群集墳
- F・終末期群集墳

後期群集墳が盛行した6世紀後半代は、前方後円墳体制の終末期であり、東国においては当該時期に造営された前方後円墳が最多の数を誇る。

小形の前方後円墳の中には、群集墳の盟主墳として、群集墳形成の端緒に位置づけられるものが多い。これは前方後円墳を群集墳造

営集団の表徴として位置づけることができるものであり、特定地域の前方向後円墳体制に包括された存在としての群集墳として認識することができる。

この場合には在地首長墓としての大形前方後円墳との関連も想起されるところであり、群集墳存在類型の典型としての、①・在地首長墓管掌型の群集墳と認識することができよう。

一方、群集墳の存在類型としては、地域外勢力との強固な連係を果たした結果として展開する、②・外部勢力連係型の群集墳の存在も想定することができる。

これは特に、特徴的な出土遺物から想定されるところである。在地首長墓の副葬品に匹敵する威信財としての金銅装の装飾大刀、馬具などから想定されるところであり、これらの配布から復元される中央特定勢力と個別群集墳との連係である。

この場合の連係は地区総体としての動向が注意されるところであり、複数の群集墳の存在のみならず、これらを統括する地区首長墓の存在も考慮される。

特定遺物に想定される供給関係は、群集墳の副葬品を特徴づける武器類も考慮の対象としなければならない。一般的には武装した集団の墳墓として位置づけられる群集墳の内容は、実際には多様である。武装率の異なる群集墳が特定地区に集合する状況が復元される。

武装率の違いは、群集墳の性格の違いとして認識することができ、武威をもって地区の安定に貢献した集団は少ない。

武装集団の存在は対抗勢力があつてこそ意義あるところであり、武器供給状況を勘案すると、この点に群集墳の存在類型が凝縮されたものと考えられる。

東国の多くの群集墳においては、群集墳総体中に占める個別造営主体の墓域は一般的に明確ではない。畿内先進地域における群集墳とは異なった独自の形成過程が想定されるところである。

古墳時代の後・終末期に群集性を顕著に明示して展開した横穴墓を含め、東国各地の高塚群集墳を検討した結果からは、個別造営主体の造墓活動の累積としての古墳の集合状態としての単位群の様相は、以下の4類に区分することができる。

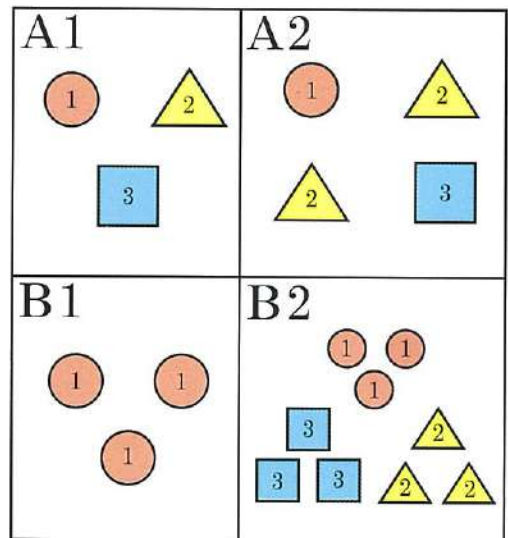
- A 1 類型：個別造営主体の墓域が明確に区分された中における一世代一基の累代的な造営。
- A 2 類型：墓域を特定した中における同時期の複数古墳を含む累代的な造営。
- B 1 類型：近接する複数の古墳の同時的な造営。
- B 2 類型：同時期の古墳が群在する継続的な造営。

これら群構成の違いとして認識できる単位群の4類型は、個別墓域の占有状況を視点として、群集墳造営集団中に占める造営主体、すなわち個別群集墳造営家族の存在状態の相違を顕現するところと考えられる。

基本的には、造営主体ごとの個別墓域が明確に確認できるA類型と、造営主体ごとの個別墓域が確認できないB類型という区分であり、造営集団中における相対的な自立性の指標として認識することが可能であろう。

実際の分析からは、A 1 ないしはA 2 類型の単位群が盟主的な位置を占め、これにB 2 類型の単位群が従属する様相、当初はB 1 類型であった単位群が次期にはA 類型に転化する様相なども看取できる。

群集墳の群構成の分析からは、直接的には群集墳造営集団中に占める造営主体の存



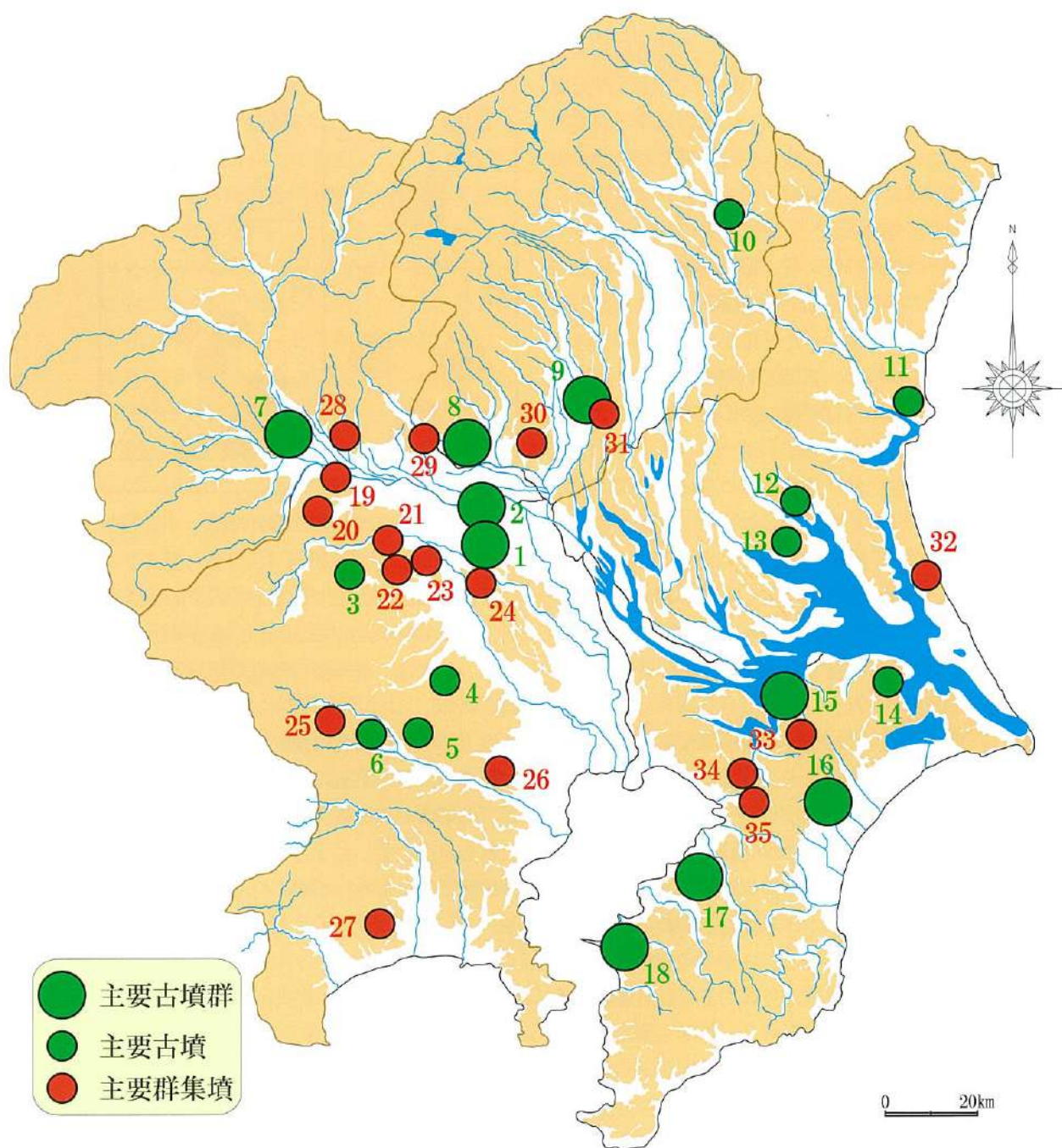
群集墳の単位群の類型

在状態の相違を想定できるところであり、造営主体の造墓活動の累積としての単位群の様相の差異は、群集墳の性格の相違として認識される。

以上、群集墳研究の視点を、造営時期・存在類型・武器の出土量・群構成などから示した。群集墳研究の必要性は喚起されるところであるが、必ずしも十分には検討されていない現状といえよう。不断の努力が必要であろう。

【参考文献】

- 近藤義郎『佐良山古墳群の研究』第1冊、昭和27年
- 白石太一郎「畿内の大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』第42・43号 昭和41年
- 水野正好「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』第5巻 昭和45年
- 広瀬和雄「群集墳論序説」『古代研究』第15号、昭和53年
- 池上 悟「群集墳としての横穴墓」『日本横穴墓の形成と展開』平成16年



- | | | | | |
|----------|------------|------------|------------|--------------|
| 1 埼玉古墳群 | 8 常見古墳群 | 15 竜角寺古墳群 | 22 立野古墳群 | 29 足利公園古墳群 |
| 2 若小玉古墳群 | 9 下野古墳群 | 16 板附古墳群 | 23 野原古墳群 | 30 黒袴台古墳群 |
| 3 穴八幡古墳 | 10 川崎古墳 | 17 姉崎古墳群 | 24 新屋敷古墳群 | 31 飯塚古墳群 |
| 4 山王塚古墳 | 11 虎塚古墳 | 18 内裏塚古墳群 | 25 瀬戸岡古墳群 | 32 宮中野古墳群 |
| 5 熊野神社古墳 | 12 玉里古墳群 | 19 旭・小島古墳群 | 26 多摩川台古墳群 | 33 公津原古墳群 |
| 6 北大谷古墳 | 13 風返稲荷山古墳 | 20 塚本山古墳群 | 27 桜土手古墳群 | 34 生実・椎名崎古墳群 |
| 7 総社古墳群 | 14 城山古墳群 | 21 鹿島古墳群 | 28 蟹沼東古墳群 | 35 草刈古墳群 |

関東地方における主要後・終末期古墳分布図

2. 関東地方における群集墳の分布

関東地方における群集墳の分布は、均一には分布しておらず、特定の地区に集中している。異なるタイプの群集墳出現の背景は、それぞれに異なるものと考えられる。

5世紀後半から6世紀前半代に造営された初期群集墳は、竪穴系の埋葬施設を構築している。基本的には単体埋葬を基本とする施設であり、多人数埋葬を基本とする横穴式石室を構築した後期群集墳とは異なる。

南関東地方における初期群集墳の典型例は、東京都粕江市の沖積地に展開する粕江古墳群であり、本来70基ほどの規模であったものと考えられている。群中の盟主墳としては、全長41mの帆立貝式の亀塚古墳が著名であり、舶載の画像鏡の出土が知られる。

粕江古墳群の形成開始時期は、辛亥銘鉄剣出土で著名な埼玉稲荷山古墳が築造された時期でもある。埼玉古墳群は稲荷山古墳の築造を契機として、以後100年間に及ぶ100m級の前方後円墳が、地域最大の古墳群として継続的に造営されている。

埼玉稲荷山古墳出土の画文帯神獣鏡と、初期群集墳の盟主墳から出土した画像鏡は、



東京都粕江古墳群分布図

①初期群集墳のみで完結する群集墳

分布地域	群名	年代	450年	500年	550年	600年	650年	700年
	戸倉松尾古墳群 (埼玉県深谷市)							
	龍尾山北古墳群 (埼玉県上岡町)							

②初期群集墳と後期群集墳からなる群集墳

24	新屋敷古墳群 (埼玉県熊谷市)							
	若林古墳群 (埼玉県坂戸市)							
	花井古墳群 (埼玉県山崎町)							
35	外間古墳群 (千葉県千葉市)							

③初期群集墳・後期群集墳・終末期群集墳からなる群集墳

28	飯沼東古墳群 (群馬県伊勢崎市)							
32	宮中野古墳群 (茨城県龍崎町)							
19	堀・小島古墳群 (埼玉県止間市)							
	塚本山古墳群 (埼玉県美里町)							
	龜古墳群 (埼玉県熊谷市)							
	古里古墳群 (埼玉県山崎町)							
	長津古墳群 (埼玉県熊谷市)							
33	公津原古墳群 (千葉県成田市)							

④後期群集墳のみで完結する群集墳

	鎌田古墳群 (埼玉県寄居町)							
	初崎古墳群 (埼玉県熊谷市)							
	川角古墳群 (埼玉県毛呂山町)							

⑤後期群集墳と終末期群集墳からなる群集墳

29	足利古墳群 (栃木県足利市)							
30	出崎古墳群 (栃木県佐野市)							
31	飯塚古墳群 (栃木県小山市)							
23	野原古墳群 (埼玉県熊谷市)							
	鉄山古墳群 (埼玉県熊谷市)							
	新町古墳群 (埼玉県坂戸市)							
26	多摩川台古墳群 (東京都大田区)							
34	主史・熊倉古墳群 (千葉県千葉市)							

⑥終末期群集墳のみで完結する群集墳

21	鹿島古墳群 (埼玉県熊谷市)							
22	立野古墳群 (埼玉県熊谷市)							
25	新戸古墳群 (東京都武蔵野市)							
27	松土古墳群 (埼玉県山崎町)							

関東地方における主要群集墳時期別変遷表

ともに河内政権からの配布と考えられる重要品であり、地方支配体制の変革時に広域連携の結果として、初期群集墳が形成されたものと考えられる。

後期・終末期群集墳の多くは横穴式石室を構築しており、多人数埋葬を基本とした埋葬観念が集団に取り込まれた結果としての造営である。初期群集墳における墳丘を単位と

した埋葬者数と、横穴式石室を単位とする埋葬者数とは異なっている。古墳造営主体の内部における埋葬されるべき人数の変化は、集団の特性把握に重要な視点となる。

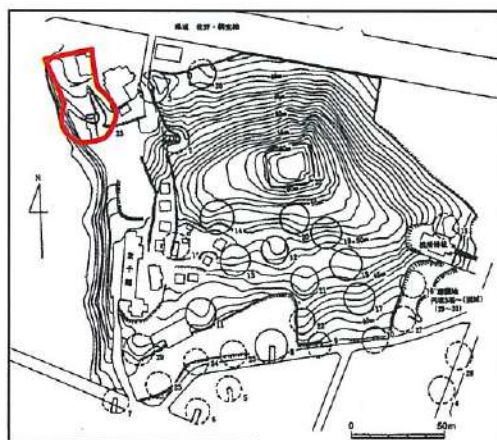
横穴式石室段階においては、埋葬にあたっての石室の使用法の違いも考慮しなければならない。初葬・追葬・改葬時における規制を勘案すると、埋葬様式は造営主体、その集合としての造営集団の特徴の相違を表出している可能性が高い。

6世紀後半代を盛行期とする横穴式石室を構築した後期群集墳は、群中に小形前方後円墳を内包する例が多い。

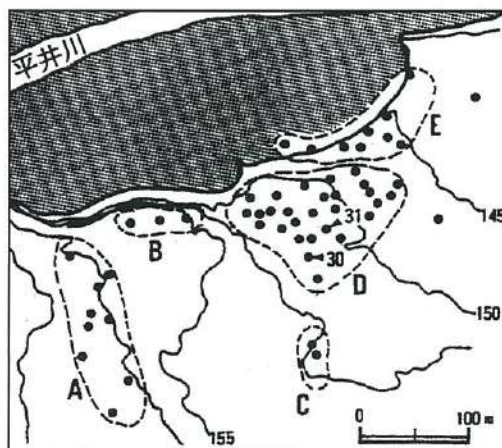
群集墳研究の先駆者である近藤義郎氏も調査に関係した栃木県足利市所在の明神山古墳群は、学史に著名な足利公園古墳群に近い丘陵上に展開する、6世紀後半から7世紀前半代に造営された後期・終末期群集墳である。

この群集墳では、丘陵の北西裾部分に横穴式石室を有する前方後円墳が1基構築されており、横穴式石室を有する30基ほどの円墳とともに群集墳が構成されている。

この群形成の端緒に小形前方後円墳を構築する群集墳の類型は、足利公園古墳群でも確認される他、北関東の各所でも確認される。前方後円墳体制の終末時に現出した、後期群



栃木県明神山古墳群分布図



東京都瀬戸岡古墳群分布図

集古墳の典型として理解されよう。

終末期群集墳は、横穴式石室を有する小形円墳の密集を一つの特徴とする。南武蔵で最大の50基ほどの規模を誇る東京都・瀬戸岡古墳群は、終末期に至り唐突に出現した古墳群であり、地域に特有の社会的背景を考慮しなければならない。新たに現出する群集墳築造の要因の一つとしては、集団の他地域からの移住も考慮の対象となろう。

初期・後期・終末期群集墳は、それぞれ出現に至る背景を異にしながらも、現象的には同一地点に重複して造営される場合も多い。いずれのタイプの群集墳も、在地首長墓との関連は問題となるところであり、この意味では前方後円墳体制下の初期・後期群集墳と、方墳体制下の終末期群集墳は、性格を異にするものと言えよう。

武蔵地域の終末期の各地の首長墓の立地は、後代の道路との関連が問題となるところであり、終末時期群集墳もまた関連性が問題となろう。

【参考文献】

佐々木憲一編『考古学リーダー 12 関東の後期古墳群』（六一書房 平成19年12月）

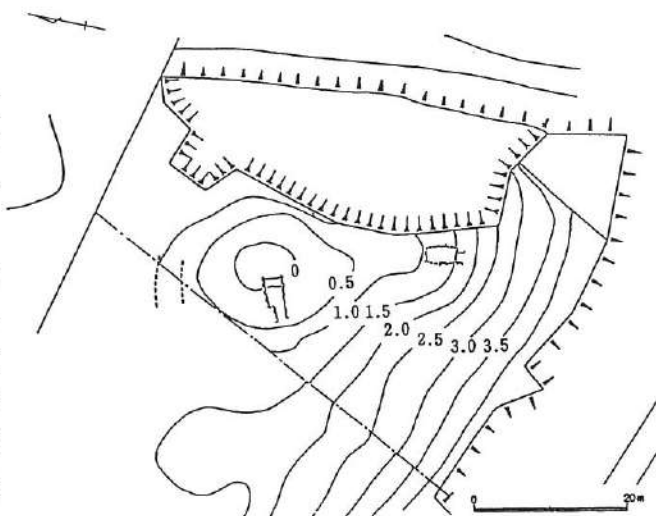
3. 野原古墳群

野原古墳群は埼玉県北部に位置する熊谷市の南端、和田川に南面する標高 45～50m の江南台地縁辺に所在する。

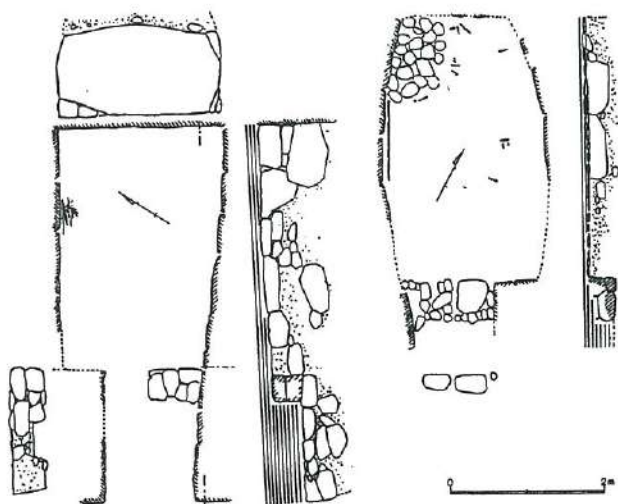
昭和 37（1962）年に採土工事の際、「踊る埴輪」として知られる埴輪（昭和 5 年の開墾中に出土）が出土したといわれる前方後円墳である野原古墳の調査が行われている。全長 40m、後円部径 16m、高さ 5m の規模で、後円部と前方部に凝灰岩の切石を用いて横穴式石室を構築した古墳であることが知られている。後円部の石室は墳丘の主軸と直交するように南西に向かって開口する片袖型の石室である。大きさは、玄室長 3.1m、奥壁幅 2.1m、羨道長約 1.5m である。前方部の石室は墳丘主軸と並行するように南東方向に開口する胴張り型片袖式石室である。大きさは玄室長 3.2m、奥壁幅 1.3m、羨道部は羨門付近が破壊されており 0.6m が確認されただけである。遺物は、後円部石室から大刀 2、鉄鏃 19、刀子 3 点が、前方部石室からは大刀 1、刀子破片が出土している。また、採土工事中に朝顔形埴輪、形象埴輪（女子像・男子頭部・翳・大刀・馬）が発見されている。

その後、昭和 39 年に立正大学文学部考古学研究室が 8 基の円墳を発掘調査し、現在 23 基の古墳が確認されている。

立正大学の調査した古墳は、第 6 号墳（現 14 号墳）・第 7 号墳（現 15 号墳）・第 9 号墳（現



野原古墳群野原古墳全測図



野原古墳群野原古墳石室実測図

（左：後円部石室、右：前方部石室）

17 号墳）・第 10 号墳（現 16 号墳）・第 11 号墳（現 22 号墳）・第 16 号墳（現 20 号墳）・第 17 号墳（現 5 号墳）・第 18 号墳（現 6 号墳）の 8 基である。

調査の結果、6 世紀後半～7 世紀前半代にかけて造営された古墳群であることが確認された。

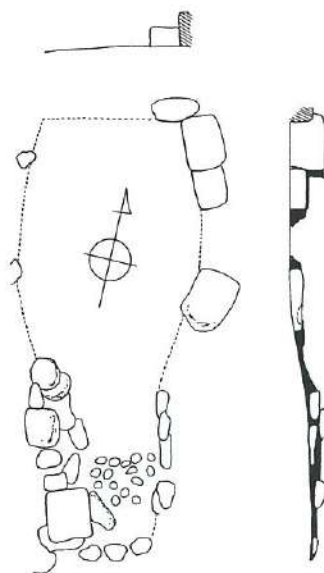
古墳 番号	墳 丘		横 穴 式 石 室								埴 輪
	規模	高さ	主体部	全長	奥壁幅	最大幅	玄室長	羨道幅	羨道長	使用石材	
6	15 × 16m	150	胴張り	360	115	150	210	70	150	凝灰岩	○
7	20m	200	両袖式	500	170		260	120	240	凝灰岩	○
9	10 × 11m	100	胴張り	310		95	210	60	100	基底部・河原石	
10	18 × 19m	230	胴張り	450	120	180	230	130	220	基底部・河原石	
11	10 × 11m	100	胴張り	390	140	200	260	60	130	基底部・河原石	
16	14 × 16m	250	胴張り	340	100	150	180	70	160	河原石	
17	11 × 12m	50	胴張り	360	100	130	220	70	140	河原石	
18	14 × 16m	120	胴張り	430	90	140	175	90 60	105 150	凝灰岩・河原石	
野原古墳 後円部	40m	500	片袖式	470	210		310	120	160	凝灰岩	○
野原古墳 前方部			胴張り	410	130	205	320	110	90	凝灰岩	○

野原古墳群 調査古墳集成表

【第6号墳】

南北 16m × 東西 15m × 墳丘高 1.5m（残存高）の円墳である。墳丘から若干の埴輪片が出土している。埋葬施設は横穴式石室で、僅かに基底部の一部が残るのみである。構築材は凝灰岩質の切石を使用し、大きさは玄

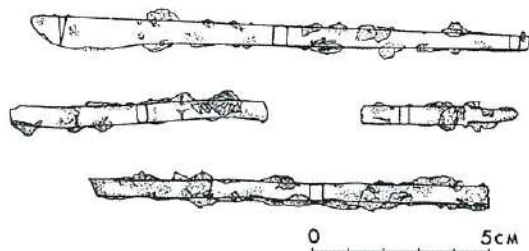
室奥幅 115cm・前幅 70cm・長さ 210cm、羨道奥幅 70cm・前幅 50cm・長さ 150cm、石室総長 360cm の小型石室である。遺物は確認されていない。



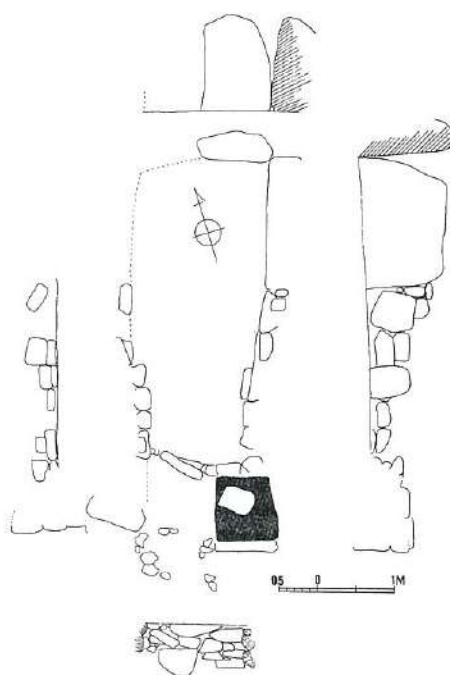
第6号墳石室写真および実測図

【第7号墳】

直径20m×墳丘高2m（残存高）の円墳である。埋葬施設は横穴式石室で、石室の下半部が残るのみである。構築材として凝灰岩を使用しており、大きさは玄室奥幅170cm・前幅150cm・長さ260cm、羨道奥幅120cm・前幅90cm・長さ240cmで、羨道前半の120cmの範囲には4段の閉塞石の遺存が確認されている。遺物は玄室床面から鉄鏃4点が出土している。出土遺物から時期は6世紀末頃と考えられる。



第7号墳遺物実測図



第7号墳石室実測図

【第9号墳】

南北11m×東西10m×墳丘高1m（残存高）の円墳である。埋葬施設は幅250cm、長さ400cmを測る粘土を使用した施設が確認されている。これは周辺の古墳群の類例などから横穴式石室の基底部と考えられるものである。粘土の状況から、胴張り石室であったものと考えられる。遺物は確認されていない。



第9号墳石室全景写真

【第10号墳】

南北18m×東西19m×墳丘高2.3m（残存高）の円墳である。埋葬施設は9号墳と同じく横穴式石室の基底部に使用された粘土部分を確認されている。残存していた根石などから大きさを復元すると全長450cm、奥壁幅120cm、玄室最大幅180cm・長さ230cm、羨道幅130cm・長さ220cmほどの胴張り石室と考えられる。遺物は耳環1点、土師器片が出土している。



第10号墳出土 耳環
(外径29mm・断面径5mm)

【第 11 号墳】

南北 11m × 東西 10m × 墳丘高 1m（残存高）の円墳である。埋葬施設は粘土を使用した横穴式石室で、基底部の粘土と、玄室床面に敷かれた小型扁平石が確認されているのみである。

敷設された石の範囲から想定すると大きさは奥壁幅 140cm、玄室最大幅 200cm・長さ 260cm、羨道幅 60cm・長さ 130cm の胴張り石室と考えられる。

遺物は玄室床面から耳環 3 点、刀子片 1 点、鉄鏃 9 点が出土している。出土した 3 個の耳環は、それぞれ大きさを異にしている。同大同形の 2 個一対で使用されたものであり、耳環からは 3 体の埋葬が想定される。出土



第 11 号墳石室全景写真

した鉄鏃は、大形の平根鉄鏃であり、7 世紀前半代に特徴的な形状を示しており、儀礼的様相の強いものである。出土遺物から古墳の所産時期は 7 世紀前半頃と考えられる。



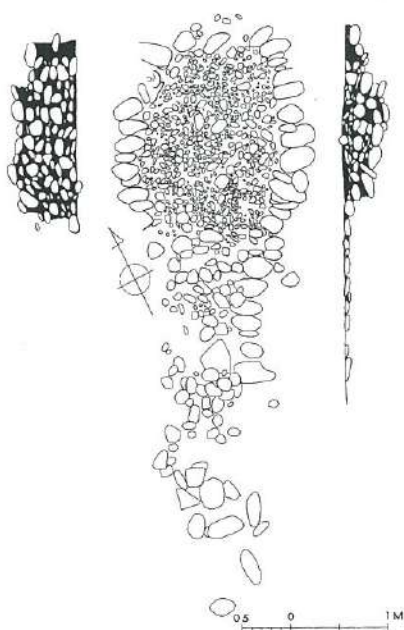
第 11 号墳出土遺物

【第16号墳】

南北16m×東西14m×墳丘高2.5m（残存高）の円墳である。埋葬施設は河原石を使用した横穴式石室である。大きさは奥壁幅100cm、玄室最大幅150cm・長さ180cm、羨道幅70cm・長さ160cmで、胴張り型石室である。羨道入口部分に60cmの範囲で閉塞石の遺存部分と考えられる長径20cmほどの河原石が確認されている。

玄室の床面には全面的に礫が敷かれている。遺物は玄室床面に敷かれた礫の間から鉄鏝の破片が出土したのみである。

横穴式石室の遺存状態が悪く、遺物も出土しておらず古墳の所産年代は明確ではないが、河原石のみを使用した石室として7世紀前半の年代が考えられる。



第16号墳石室実測図



第16号墳玄室



第16号墳羨道からみた玄室



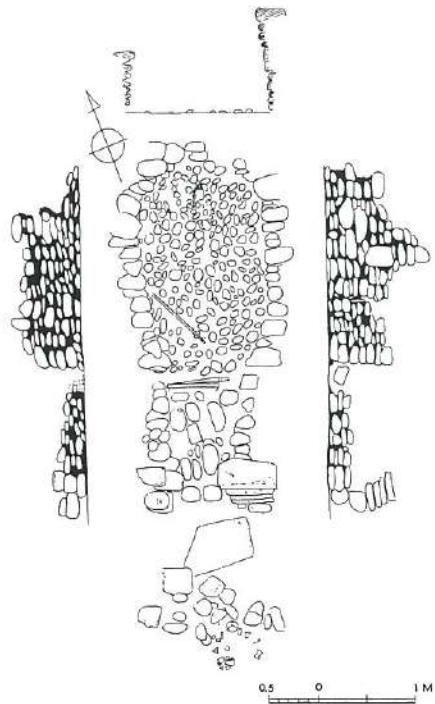
第16号墳玄室左側壁



第16号墳玄室右側壁

【第 17 号墳】

南北 12m × 東西 11m × 墳丘高 0.5m（残存高）の円墳である。埋葬施設は河原石を使用した横穴式石室である。大きさは奥壁幅 100cm、玄室最大幅 150cm・長さ 180cm、羨道幅 70cm・長さ 160cm である。玄室と羨道の区画は、緑泥片岩の板石の框石が使用されていた。遺物は玄室から直刀 1 本、刀子 1 点、耳環 2 点、羨道前の墓前域から須恵器（フラスコ形細頸瓶）2 点が出土している。古墳の所産年代は、出土遺物から 7 世紀前半頃と考えられる。



第 17 号墳石室実測図



第 17 号墳玄室遺物出土状況



羨道側からみた第 17 号墳石室全景

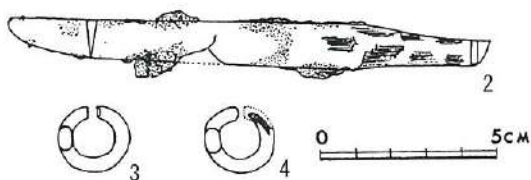


第 17 号墳玄室

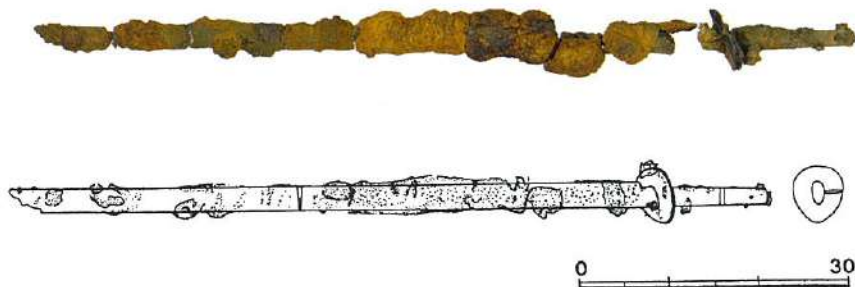


1. 刀子
残存長 111mm
身幅 15mm
2. 刀子
全長 140mm
身幅 13mm

- 3, 4. 耳環
長 径 20mm
短 径 18mm
断面径 4mm



刀子・耳環実測図



5. 直刀
全長 87cm、身長 71cm、身幅 3cm、茎長 16cm



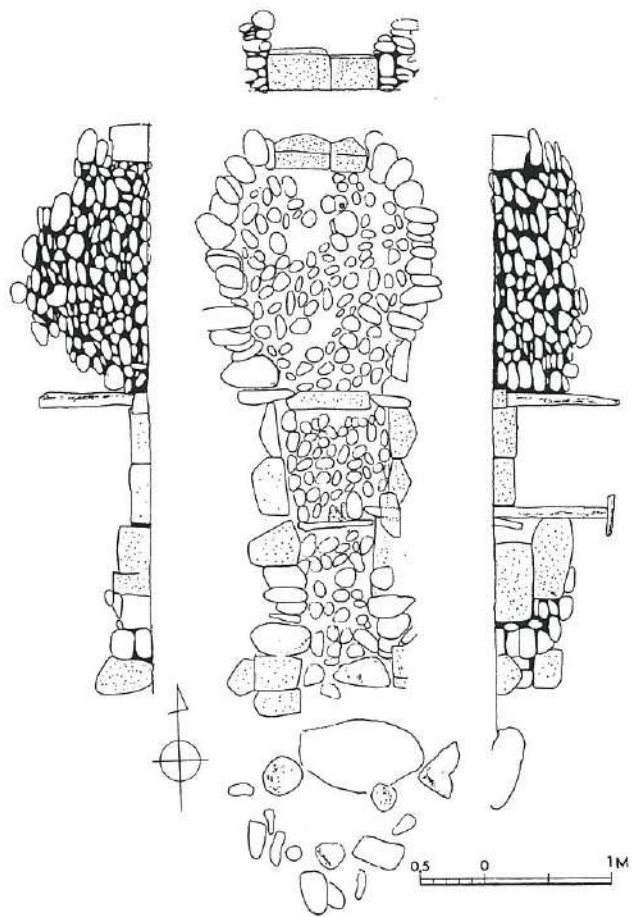
6. フラスコ形細頸瓶
器高 22cm、口径 8.5cm、胴部最大径 14.7cm



7. フラスコ形細頸瓶
器高 20.5cm、口径 8.5cm、胴部最大径 15.2cm

【第18号墳】

南北16m×東西14m×墳丘高1.2m（残存高）の円墳である。埋葬施設は凝灰岩と河原石を使用した横穴式石室である。大きさは奥壁幅130cm・最大幅140cm・長さ170cm、前室奥幅90cm・前幅70cm・長さ100cm、羨道幅70cm・長さ160cmの両袖式石室である。玄室両壁と敷設に河原石が、玄室奥壁と前室・羨道の両壁に凝灰岩が使用され、野原古墳群の他の古墳と異なる構築をする石室である。玄室の境に緑泥片岩の板石の門柱石が配置され、床面には凝灰岩の梱石が置かれ、玄室と前室が明確に区別されている。遺物は玄室奥壁の敷石上から耳環1点、刀子の破片が出土している。また墓前域からは土師器の破片が出土している。



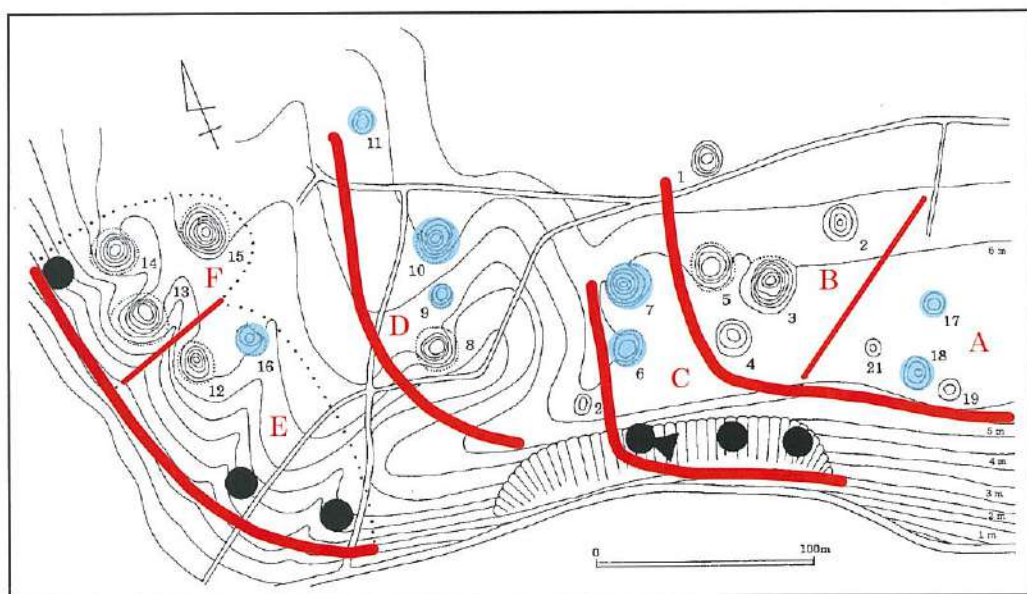
第18号墳石室実測図



- | | |
|----------|----------|
| 1. 耳環 | 2. 耳環 |
| 長 径 22mm | 長 径 33mm |
| 短 径 2 mm | 短 径 28mm |
| 断面径 5 mm | 断面径 7 mm |



第18号墳出土遺物および石室写真



野原古墳群 群構成分類図

【野原古墳群の群構成】野原古墳群は、全長40 mの前方後円墳である野原古墳を盟主墳として造営された古墳群である。

古墳群の総数は、湮滅した野原古墳など6基ほどを含んで30基ほどであったものと想定される。このうち内容の判明しているのは、盟主墳である野原古墳と、立正大学考古学研究室で調査した8基に限られる。

前方後円墳である野原古墳は、埴輪を伴い後円部に凝灰岩使用の片袖型式の石室を構築する段階の築造であり、6世紀後半代の所産と考えられる。やや遅れて前方部に築造された石室は、凝灰岩を使用するものの胴張り様相を保持するものである。

調査された古墳のうち埴輪を伴う古墳は、野原古墳に近接する6・7号墳の2基のみである。これらの石室はともに凝灰岩を使用した、6号墳石室が胴張り石室、7号墳が片袖型式石室であり、野原古墳に平行して営まれたものと考えられる。すなわち、野原古墳および近接する4基ほどの円墳が先行して造営されたものと考えられる。

この内容は、階層性を反映した同時期古墳

の群集する単位群であるB1類型と考えられる。

古墳群総体の分布でも、地形的区分および古墳間の間隙を勘案すると、限定された墓域に4～5基の古墳が集合する状況を確認できる。石室の開口方向と、個別古墳を連ねる墓道を想定すると、A～Fの6単位群の存在が考えられる。

調査された古墳の属する単位群は、C単位群以外では、A・D・Eの3単位群である。調査成果からは、これらの3単位群に属する古墳は、いずれも7世紀代に築造された古墳であることが判明している。古墳時代終末期である7世紀前半代を盛行期とする群集集と確認できる。

4～5基からなる単位群の内容は、2世代ほどと想定される造営期間を考慮すると、同世代に複数の古墳を造営したA2類型の単位群と考えられよう。

すなわち野原古墳群においては、6世紀後半代のB1類型、7世紀前半代のA2類型単位群の展開を確認することができる。

4. 北関東地域の群集墳

立野古墳群

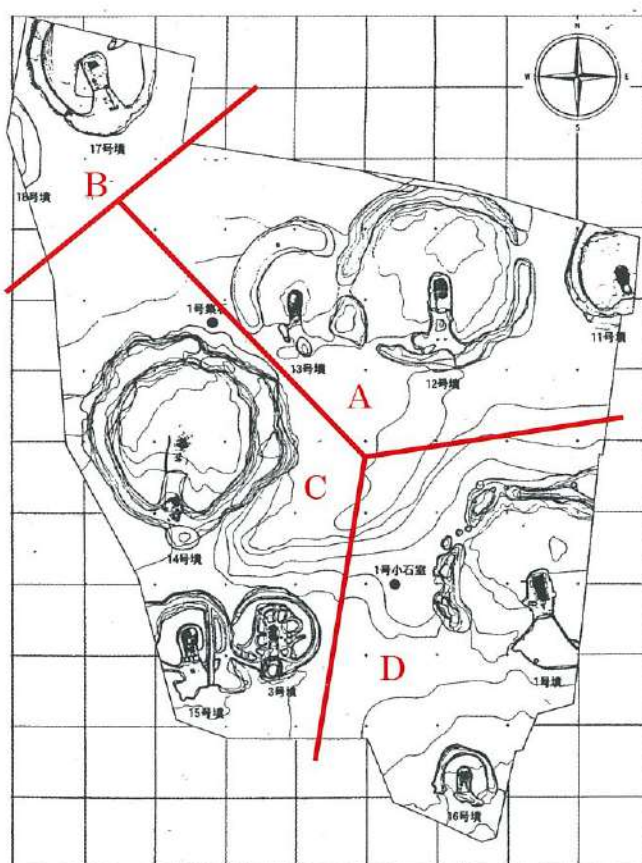
立正大学熊谷校地の占地する、江南台地の南を東流する和田川の上流域の台地縁辺に展開した円墳のみの群集墳であり、平成14年度に調査されている。90m×90mの範囲内に確認された10基の円墳が発掘調査されて、内容が明確になっている。古墳の墳丘は削平されて、周溝と主体部である半地下式に構築された横穴式石室が調査されている。

調査された古墳は、規模により3区分できる。①類は周溝内径21～23m規模の第1・12・14号墳の3基、②類は周溝内径14m規模の第17号墳、③類は周溝内径10m以下の第3・11・13・15・16・18号墳の6基である。

この古墳規模の3区分と、主体部である横穴式石室の石材は関連しており、①・②類はすべて凝灰岩の切石使用であり、③類は凝灰岩切石と河原石が使用されている。河原石が使用されている古墳は11・13・15号墳の3基である。

①・②類古墳の横穴式石室は、類似した様相を呈している。当該地域における横穴式石室の時期的様相を反映して、基本的には胴張り石室と把握できるものの、奥・側壁が僅かに張り出す程度に形骸化している。

一方、③類古墳のうち河原石を使用する11・13・15号墳の3基の石室は、奥・側壁が顕著に張り出す胴張り石室であり、③類古墳のうちの凝灰岩切石使用の3基の石室は、奥壁のみが張り出す特徴を示している。



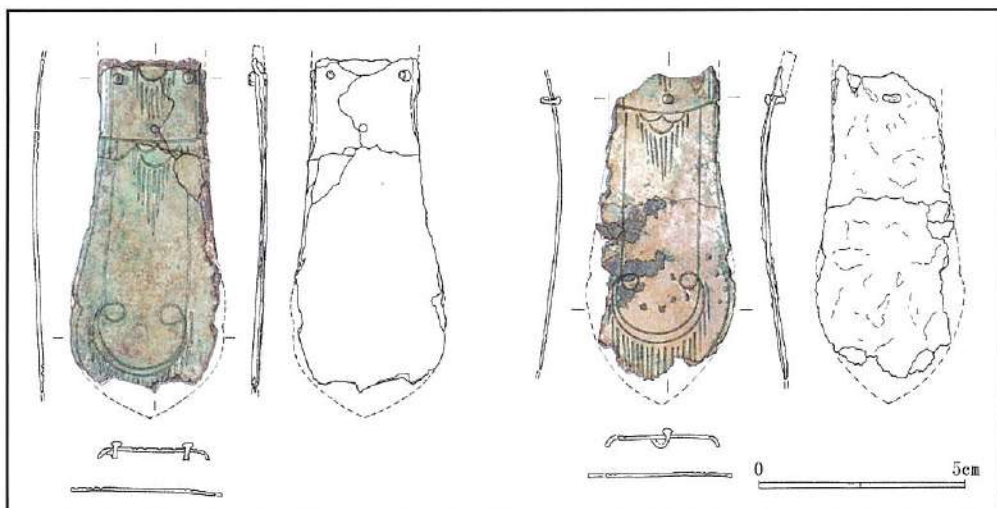
立野古墳群 群構成分類図

以上の立野古墳群の胴張り石室に確認できた様相の差異は、年代の変遷に従ったものと考えられる。

石室規模も、古墳規模に関連している。①類古墳の石室全長が450～470cm、②類古墳が410cm、③類古墳が270～410cm規模であり、時期的変遷に従った小形化を示している。

個別古墳の構築時期を、僅少な出土遺物から想定すると、①・②類古墳は7世紀中葉、③類古墳は7世紀後半代となる。典型的な終末期群集墳として位置づけることができる。

【群構成】この立野古墳は、個別古墳の配置により、個別造営主体の単位群を明確に把握することができる。①・②類古墳と③類古墳が組み合わさった2～3基を基本とした単



立野古墳群第12号墳出土 金銅製毛彫り杏葉

位を確認することができる。

周溝内径21～23m規模の①類古墳である1・12・14号墳と、②類古墳である17号墳の4基が群形成の端緒を担って造営されている。以降はこの3基の古墳の周辺に、個別造営主体による造墓が果たされており、単位群間には間隙を意識している。

A群においては12号墳の西側周溝を意識して13号墳が継続しており、東端の11号墳を最新の所産と位置づけられる。

12号墳からは、古墳時代終末期において注目される金銅製毛彫り杏葉が出土しており、盟主墳として把握することができる。また、継続して造営された11・13号墳の2石室規模は400cmを越える大形石室であり、群中に占めるA群の優位性の表れと考えられる。

北西端に位置するB群は、②類古墳の17号墳と、これに西接する18号墳の2基が確認できる。時期に従った古墳規模の減少を勘案すると、B群の形成開始時期がやや遅れたものと考えられることができる。

C群は①類古墳の14号墳と、③類古墳の3・15号墳の3基が確認されている。14号墳の周溝は完全に圍繞している点を重視する

と、①類古墳の中でも先行して築造された可能性も考えられる。

D群は①類古墳の1号墳と③類古墳の16号墳の2基、これに1号墳の西側に全長70cmの小形石室が伴っている。

【終末期群集墳】以上に確認できた立野古墳群の群構成の様相は、B2類の単位群として把握できる。個別墓域の占有および石室規模に若干の格差を内包するとはいえ、基本的には等質的な個別造営主体の集合としての群集墳と理解することができる。

顕著な格差を有さない4単位の造営主体を有する古墳造営集団による7世紀後半代の造営であり、最有力の被葬者に金銅製毛彫り杏葉が副葬されており、この古墳群の性格を表している。

金銅製毛彫り杏葉は、全国で7世紀代の古墳などから60点ほどの確認例であり、稀少性が重視される。小形古墳からの出土が目立つが在地首長墓からも出土しており、出土古墳を地域を主導した存在として位置づけることができよう。

【参考文献】

埼玉県大里郡江南町教育委員会『立野古墳群発掘調査報告書』平成17年

鹿島古墳群

南流する荒川の右岸に占地する群集墳であり、荒川に沿った長さ100m、幅35mの範囲に97基の古墳が展開している。これらの古墳は荒川に面する崖の近くに密集して構築されている。調査された古墳は、荒川に面する崖から離れた地点に位置するものであり、36基が調査されて、25基の横穴式石室が確認されている。

古墳からの出土品は武器類を主体とするものであり、古墳の所産時期を明示する土器類の出土は僅少であった。

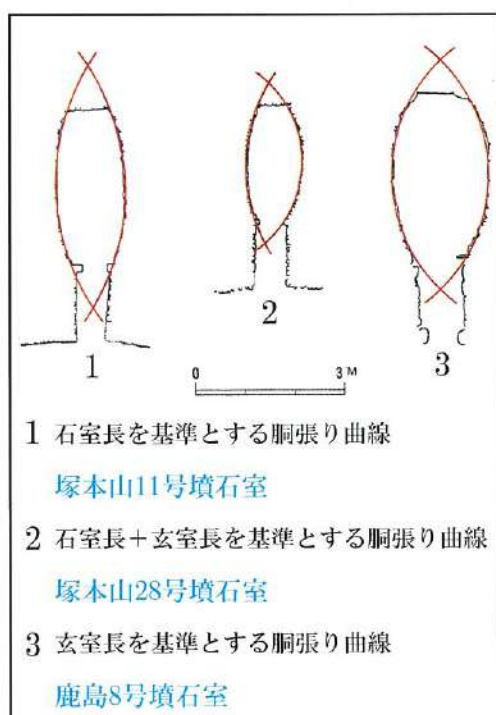
従って、古墳の所産時期の検討には、横穴式石室の構造的検討によらなければならない。鹿島古墳で確認された25基の横穴式石室は、すべて河原石を用いた胴張り石室と呼称される構造の石室である。

【胴張り石室】古墳の埋葬施設として構築された横穴式石室は、その淵源を朝鮮半島の百済の地に求めることができ、4世紀の末頃に北部九州の地に導入され、徐々に日本列島の東側へ拡散していき、関東地方へは6世紀前半代に波及した。

横穴式石室の基本形としては、遺骸を埋葬する玄室の各壁は直線をなす長方形ないしは方形の平面形を呈するものであるが、玄室の各壁が曲線を呈して外側に張り出す平面形を呈するものもあり、胴張り石室と呼称されている。

埼玉県北部における横穴式石室は、6世紀前半代に小形古墳に導入される。これらは小形の、玄室と羨道との境の部分明確としない無袖形の平面を呈するものである。

6世紀の後半代には各地の首長墓としての前方後円墳に、玄室と羨道との境の片方部分の区画を明確にした片袖形の平面を呈する石室が導入された。



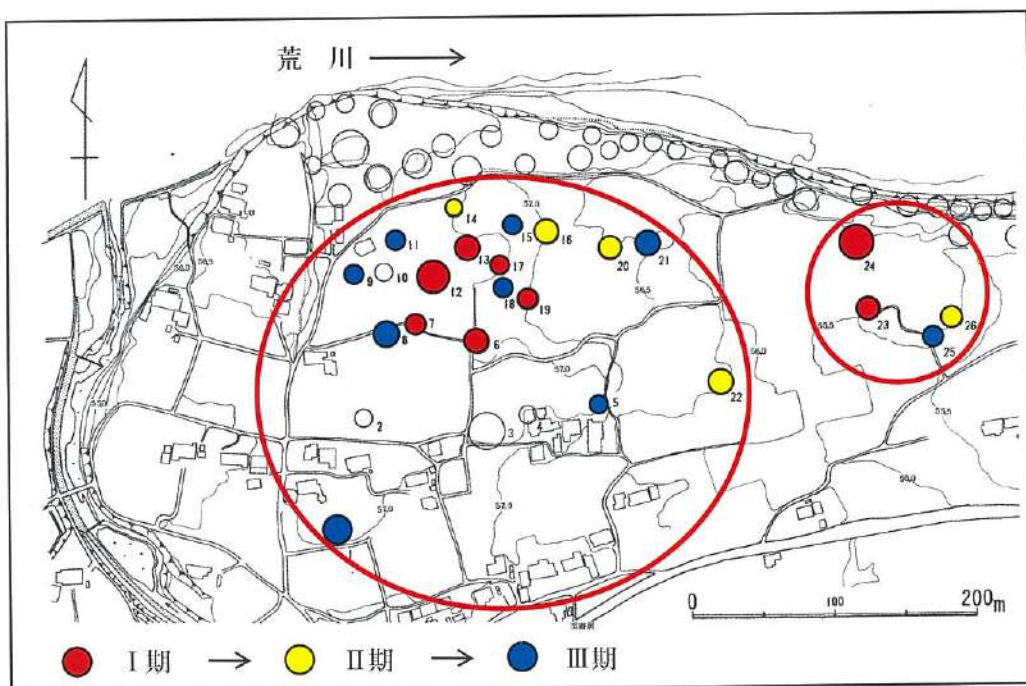
胴張り石室分類図

埼玉県北部の最有力古墳群である埼玉古墳群中の將軍山古墳の横穴式石室も片袖形の石室であり、野原古墳群の造営の端緒を担った全長40mの前方後円墳である野原古墳の後円部石室も同型式の石室である。

胴張り石室は、片袖形の石室に遅れて導入されており、この先後の関係は野原古墳の前方部石室が胴張り石室である点において明瞭である。すなわち埼玉県北部地域において胴張り石室は6世紀後半代に導入されているものの、7世紀の終末期に盛行した石室型式と認められるものである。

埼玉県北部地区の終末期群集墳の主体部として構築された横穴式石室は、胴張り石室が主体的に展開しており、玄室側壁の曲線の創出企画により、

- ①・石室長を基準とした曲線の創出。
- ②・片側壁を石室長、他方を玄室長とする左右が歪な曲線を呈するもの。
- ③・玄室長を基準とした曲線の創出。



鹿島古墳群 群構成分類図

④・玄室長よりも短い単位を基準とした曲線の創出、に区分できる。

玄室側壁の曲線創出の違いは、横穴式石室構築技術の変化として確認することができるものであり、時期的変遷の結果と認識することができる。

①類の石室長を基準とした緩やかな曲線の創出は、塚本山古墳群などの検討では埴輪を伴う段階に出現している。

一方、③類の玄室長を基準とした顕著な曲線の創出は、7世紀中頃以降の年代が考慮されるところであり、①類と③類の間に左右側壁が歪な曲線を呈する②類を位置付けることができる。

【群構成】 胴張り石室の側壁曲線の創出企画を基準として、個別古墳の所産年代を考えて群の構成を復元すると、重要な事実を確認することができる。

すなわち、鹿島古墳群においてまとまって調査が行われた1～22号墳が集中する地点においては、群中に個別造営主体ごとの限定

された墓域を認めることができない。6・7・12・13・17・19号の6基の胴張り①類の石室が群在して造営され、次期に②・③類石室がこの周囲に展開している。全体として複数の古墳が累代的に造営されたB2類型の単位群と考えることができる。

これに対して24～26号墳の4基では、やや広い墓域の中に2→1→1基の古墳が累代的に造営されており、A2類型と想定することもできる。これは古墳群の盟主的位置を占めた造営主体の累積活動の結果とも考えられる。

終末期に特徴的な石室を有する群集墳を集中的に造営した背景が問題となる。

【参考文献】

埼玉県教育委員会『鹿島古墳群』昭和47年
池上 悟「北武蔵に於ける胴張り石室に関する若干の考察」『中央考古』創刊号 昭和55年

新屋敷古墳群

新屋敷古墳群は、埼玉県鴻巣市に所在するものであり、大宮台地の北端部に立地している。埴輪窯跡として著名な生田塚遺跡と北側に隣接する古墳群であり、武蔵地域の首長派墓群として著名な埼玉古墳群とは、南側に8km離れている。

昭和60年から平成7年にかけて断続的に行われた調査で77基の古墳の所在が明確になっている。古墳の墳丘はすべて削平されており、古墳の周溝の存在からの確認である。

古墳の墳形は、古墳群形成の端緒を担った全長42.5mの帆立貝式前方後円墳である60号墳以外はすべて円墳であり、周溝内側の規模は、径5.4mから20.1mと変容が大きい。

墳丘が削平されていたこともあり古墳の埋葬施設は不明であるが、後期群集墳に特徴的な横穴式石室の基底部は確認されておらず、初期群集墳の一般的特徴である竪穴系の埋葬施設が構築されていたものと考えられる。

円墳周溝内側の規模を集成・分類すると、以下の9区分が可能である。

①・径5.4m、②・6.6～7.7m、③・8.3～10.2m、④・11～11.5m、⑤・12～13.5m、⑥・14～15.3m、⑦・15.9～16.7m、⑧・17.5～18.8m、⑨・20.1m、である。

周溝からの出土遺物によって、77基中の60基の古墳の所産時期が明確になっている。I a期、すなわち5世紀後半代に構築された古墳は、古墳群の中央部を占地した、①・盟主墳である帆立貝式古墳の60号墳と、この周囲に展開する44・46・57・58・63号墳の6基からなる単位群、②やや東に離れて展開する4・35・49号墳の3基からなる単位群の存在を確認することができる。

これを古墳規模から検討すると、I a期で

は58号墳に寄生した57号墳の①類を除くと、⑤～⑧類のみの相対的に大形の古墳によって形成されている。

また、この古墳群では全体の25%である19基の古墳の周溝から埴輪が確認されており、古墳の階層性を明示している。I a期では、帆立貝式古墳の60号墳と、⑦類と⑧類規模の4基の古墳から埴輪が確認されている。

埴輪出土古墳は、盟主墳を含む単位群で大形の3基、東側の単位群で大形の2基の古墳であり、59%の古墳から出土している。

I b期、すなわち6世紀初頭頃の所産にかかる古墳は、最多の28基を数え、全体の47%を占める。当該期の古墳規模は②類から⑨類に及ぶものであり、古墳構築数の増加に起因して、新たに②～④類の小形古墳が創出されている。新たな小形古墳は当該期古墳の3分の1を占め、同様の数を⑤類規模古墳が占め、⑥～⑨類規模が3分の1を占める特徴的な階層構造を明示している。

当該期の古墳は、I a期の古墳の周囲に構築されたものであるが、細かく見ると60号墳の北側に10基、南側に4基、北に開く浅い谷地形の北東側に14基の分布である。3つの単位群のうちでは、北側の単位群が相対的に大形古墳を多く含む。

I b期の埴輪出土古墳は、8基が確認されている。古墳規模との対応では埴輪出土古墳は⑤類～⑧類古墳に限定され、最大の⑨類規模の65号墳と、新興の②～④類の小形古墳には伴わない。当該期古墳28基中の8基であり、29%の古墳に埴輪が伴っている。

これを単位群別に見ると、北側単位群に4基、北東単位群に4基となり、少数の南側単位群では埴輪を伴う古墳は構築されていない。単位群の規模に比例した階層性が明示されている。

Ⅱ期、すなわち6世紀前半代に構築された古墳は15基を数え、総体の4分の1を占める。当該期に構築された古墳の規模は②類から⑥類に及ぶものであり、⑦～⑨類規模の大形古墳は構築していない。古墳群造営の停滞に起因するものであろう。

当該期古墳の分布は、北に開く浅い谷地形の北東側のⅠb期古墳の外側に、8基が集中造営された単位群が目立つ。この他では60号墳の北側ではⅠb期古墳の間に2基、60号墳の南側に列をなす3基の単位群、さらに南端部では2基が確認されており、4単位群の存在が知られる。

当該期の古墳では、埴輪出土古墳は3基に限定される。15基中の3基であり、僅か20%の古墳に伴うのみであり、厳正な階層性を明示している。8基からなる北東単位群中の2基と、2基が確認されている南端単位群中の1基からの埴輪の確認であり、古墳規模に比例する出土ではない。

2基の北側単位群、3基の南側単位群には埴輪を伴う古墳は構築されておらず、前代と同じく集団内の階層性の発露としての埴輪祭式の採用と理解できよう。

Ⅲ期、すなわち6世紀後半代に構築された古墳は、総数8基を数える。総体の13%と古墳群終焉時の衰退と看取できよう。

この時期には、新たに横穴式石室を埋葬施設として構築した後期群集墳が形成を開始している。しかしながら、旧来の伝統に規制されたこの群集墳においては、埋葬施設の変革を伴う発展は認められない。この事実からは、群集墳は特定時期の支配階層を支えた、地域的集団の墓制として機能したものと理解することができよう。

当該期の古墳規模は③～⑥類であり、過半数が12m以上である。8基の古墳は、時期に従った結果として、古墳群の外縁部に分

類別	時 期	Ⅰ a 期	Ⅰ b 期	Ⅱ 期	Ⅲ 期
	墳丘規模	4250			
⑨類	(cm)		2010		
⑧類	1880	1	2		
	1750～				
⑦類	1670	3	2		
	1590～				
⑥類	1530	2	3	3	1
	1400～				
⑤類	1350	1	11	4	3
	1200～				
④類	1170		4	1	2
	1100～				
③類	1020		2	6	2
	830～				
②類	770		3	1	
	660～				
①類	540	1			
	合 計	9	28	15	8

埼玉県・新屋敷古墳の古墳規模類別表

布している。北に開く浅い谷地形の北東側のⅡ期古墳群中に1基、中間部の東端に3基、古墳群の南端部に4基が集中しており、3単位群の存在を確認できる。

当該期の埴輪出土古墳は3基に限定される。8基中の3基であり、38%の保有率となる。3単位群中の1基ずつからの埴輪の確認であり、単位群を代表する1基に伴っている。

古墳群終焉時における、単位群の縮小と均一化に従った埴輪祭式の採用現象を確認することができる。

【単位群と盟主墳の変遷】以上時期別に構築された古墳を、群在の状況から単位群として捉えて記述した。この時期別変遷はⅠa期～2、Ⅰb期～3、Ⅱ期～4、Ⅲ期～3となる。

時期別の単位群を構成する古墳数の平均は、4.5→9.3→3.8→2.7となり、時期別古墳構築数の変化は単位群の数ではなく規模に対応する点を確認できる。

これらの単位群は、同時期の古墳の群集として確認でき、まさに集団墓としての形成を確認できる。上述した群集墳の単位群の類型ではB1類型と確認でき、総体として集団

墓の累代的な造営として、B2 類型として把握することができる。

B2 類型の単位群では個別造営主体の墓域は特定できない。古墳造営集団内の世代ごとの被葬者の包括であり、祖先よりも世代が重視された集団墓として考えることができよう。

同時期における複数の単位群の存在は、集団内における小集団の分立状況を反映するものであるが、これを直接に古墳造営主体として理解することはできない。

この新屋敷古墳群においては、周溝の一部が途切れてブリッジをなすものが多い。このブリッジの方向を考慮すると、単位群内の単位小群を区分することができる。I b 期の 14 基からなる北東単位群では、25 + 26、28 + 29、32 + 33、37 + 52 など 2 基からなる単位小群を確認できる。II 期の 8 基からなる北東単位群では、19 + 22、23 + 24、15 + 16 + 18 などの、2 ~ 3 基からなる単位小群を確認できる。

次代の群集古墳における古墳造営主体との比較からは、この単位小群との係わりが問題となろう。2 ~ 3 基からなる単位小群の存在は、古墳造営集団内における小集団中の最小単位を明示しており、古墳造営の基礎単位としての個別家族の存在を暗示する。

同時期における複数の単位群の存在は、相互の階層性も内包している。I a 期の盟主墳は全長 42.5m の帆立貝式古墳墳の 60 号墳である点は明白であり、この古墳の築造を契機として群形成が開始されている。出土埴輪に家屋・人物・馬形などの形象埴輪を含む点においても他の古墳との区別は明瞭である。

I b 期の盟主墳は明確ではない。古墳の属する単位群・古墳規模・埴輪の出土を重視すると、北側単位群中に位置する⑧類古墳の

43 号墳と想定することができよう。

しかし当該期には類似規模の古墳は他に 2 基認められ、埴輪出土古墳は他に 7 基知られる。43 号墳と同じく⑧類古墳で埴輪を有する古墳としては 40 号墳が確認できる。

43 号墳が直接に帆立貝式の 60 号墳からの系譜を想定できるのに対し、北東単位群の不整周溝形態を採る 40 号墳は、隣接する 35 号墳からの系譜を明示している。

I b 期には、当初の単位群間の圧倒的な格差は解消し、北単位群と北東単位群は拮抗する立場に至ったものと考えられよう。

II 期の盟主墳としては、最大規模の北東単位群中の埴輪を伴う 15 号墳を想定することができる。3 基認められる当該期の最大規模の⑥類古墳の 1 基であり、周溝規模も他の古墳よりは広い。II 期に至り北東単位群の優位性が明確になったものと理解できよう。

III 期の盟主墳は明確ではないが、埴輪を有する最大の⑥類古墳の 1 号墳を想定できよう。当該期の特徴として、小規模な 3 単位群に 1 基ずつの埴輪出土古墳が構築されており、この意味では等質的である。

新屋敷古墳群は、形成時期を勘案して、隣接する埴輪窯製品の供給から、武蔵最大の埼玉古墳群との関連が重視されている。近隣の熊谷市・中条古墳群、行田市・斉条古墳群、同・若小玉古墳群、同・若王子古墳群などとともに、埼玉政権を支えた政治的地域集団の造営した群集墳として位置づけられている。

当該期の初期群集墳の形成は、北武蔵地域のみではなく、南武蔵多摩川中流域の狛江古墳群でも認められる。広範囲にわたる地域支配体制の変革時に、初期群集墳の出現の背景要因を求めることができよう。

【参考文献】

大谷 徹ほか『新屋敷遺跡 D 区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 平成 10 年

黒袴台遺跡古墳群

黒袴台古墳群は、栃木県の西部の佐野市に位置している。南側に緩く傾斜する台地上に展開した古墳群であり、調査範囲内で30基の古墳が発掘されている。この古墳群で確認された埋葬施設はすべて横穴式石室であり、周溝を伴った古墳以外に埋葬施設としての石室のみが確認されている例が多い。

古墳の周溝の内径規模では、①・30m以上、②・26～30m、③・21～25m、④・12～20mに4区分でき、群中の西側と南側に大形古墳が集中する傾向を認めることができる。

これらの古墳は遺存状況が悪く出土遺物も僅少であるために個別古墳の造営時期は必ずしも明確ではないが、埋葬施設である横穴式石室の様相から、①類：埴輪を伴う長台形平面石室、②類：胴張り石室、③長方形平面石室の順番に変遷したものと想定することができる。

I期は6世紀末から7世紀初頭、II期は7世紀前半、III期は7世紀中葉を主体とする時期と考えることができる。

これを基にした時期区分と古墳配置状況からは、古墳群はA・B・Cの3単位群に区分できる。A群は径30m以上の大形の古墳を主体として、I期に860号墳と3号の2基、II期に6・7・14・15号墳の4基、III期に1・5号墳の2基が造営されたものと考えられる。

このうちI期の860号墳から金銅装の圭頭大刀、3号墳からは直刀2本が出土しており、860号墳の優位性が確認できる。I期にはC群の723号墳も構築されているが古墳規模は22mであり、直刀は出土していない。群ごとの格差を反映したものと理解できよう。

II期の6号墳からは象嵌を有する鐔を伴う直刀が出土しており、15号墳から出土の直刀の鐔にも象嵌が認められる。II期C群の724号墳からは、地方産かと疑われる9円孔鐔を伴う直刀が出土しており、II期のB群29号墳から刃関孔を有する大刀2本、33号墳から直刀2本が出土している。

B群はI期には古墳を造営しておらず、II・III期の古墳も径20m以下の規模で明確な周溝を伴わない古墳も多く、総体として個別造営主体の墓域も明確ではない集団墓の様相を明示している。

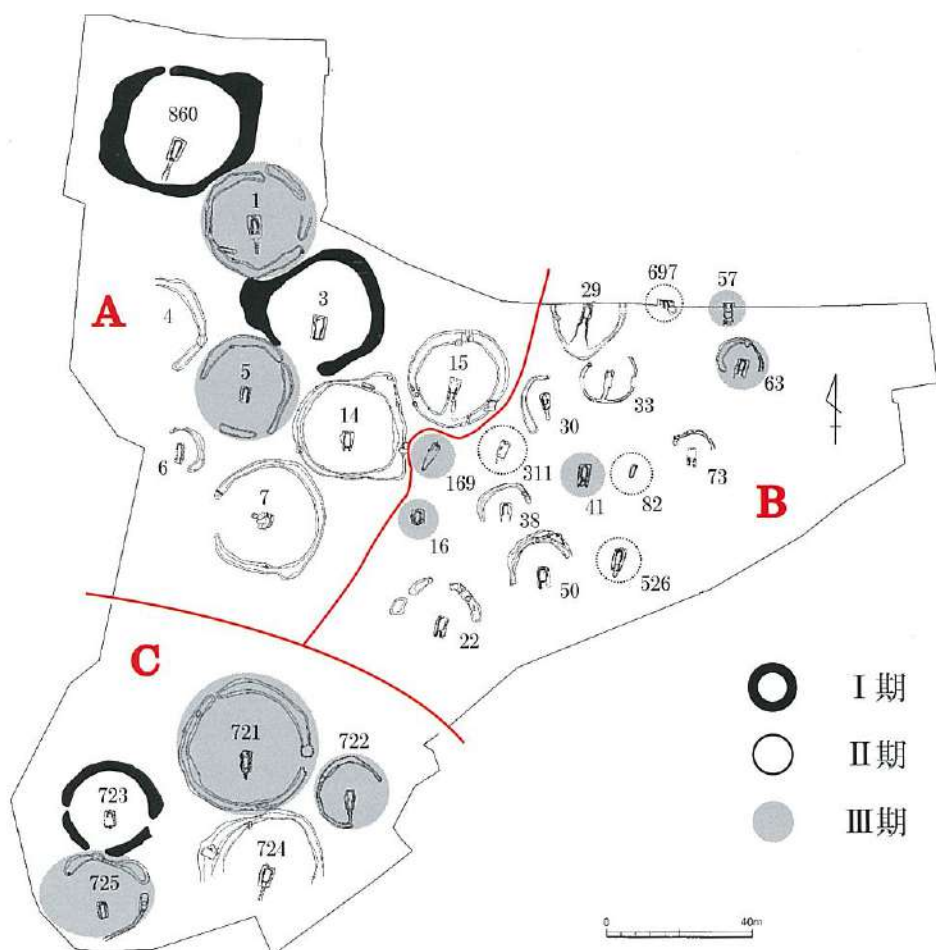
古墳造営集団内では、劣勢の階層による造墓と理解できる。従って29号墳出土の2本の刃関孔刀の位置づけも自明であるが、長さ88cmと97cmは長大な部類に属し、88cmの大刀には12円孔鐔を伴っている。

集団内の出自は劣勢であるものの、傑出した個人故の刃関孔刀の副葬と理解できるものの、同時期A群出土の象嵌大刀と比較すると、この下位としての位置づけが可能であろう。

III期では、同時期に複数古墳を造営し得る有力古墳造営主体であるA・C群からの直刀の出土は確認できず、僅かにB群73号墳から直刀1本の出土が確認できるのみである。

C群はI期に723号墳の1基、II期に724号墳の1基、III期に至って721・722・725号墳の3基の古墳が造営されている。A群ほどではないが比較的大形の古墳が構築されており、注目される。

この黒袴台古墳群に窺われる群中の単位群の様相は、同時期に複数の大形古墳をもって造営されたA群が最有力のA2類型、同様相ではあるがやや小形の1→1→3基が構築されたC群もA2類型、明確な周溝を伴わない小形古墳が主体となって、I・II期に



黒袴台古墳群 群構成分類図

11 → 5 基の古墳が構築された B 群を B 2 類型の単位群と考えることができる。

すなわちこの黒袴台古墳群の特徴として明確になったところは、異なる様相の単位群の集合として形成された、終末期に造営の主体をおく古墳群である点である。

単位群の様相とともに黒袴台古墳群では、古墳被葬者の性格を雄弁に物語る遺物として刀剣類を検討した。この視点では、I・II 期における A 群の圧倒的優位性が確認でき、古墳規模に対応している。しかし 7 世紀中葉以降の III 期においては、いずれの古墳からも刀剣類の出土は確認されておらず、この視点からの検討を困難としている。

III 期に構築された古墳規模は、A 群の 2 基が 22m と 25m であるのに対し、C 群の 3 基

は 17m・21m・31m であり、構築基数とともに大形古墳を含むという点において C 群の優位性が確認できる。盟主的立場が A 群から C 群に変遷したものと考えられる。

古墳群の性格を特徴づける刀剣類は、金銅装大刀・象嵌大刀・刃関孔大刀の区分が格差を内包するところであり、地方内の階層性・地域間の階層性とともに相互の連携を明示している。近年出土した類例からの検討では、刃関孔大刀は関東地方で生産された地域内の連携を明示する大刀であるものと考えられる。

【参考文献】

栃木県教育委員会『黒袴台遺跡』平成 13 年

足利公園古墳群

足利公園古墳群は、栃木県の西南部を占める足利市に所在する、日本考古学史に重要な位置を占める古墳群である。

明治になって最初に、学問的に調査された古墳群であり、調査を行った坪井正五郎博士とともに著名なものである。

坪井正五郎博士は、文久3年江戸浜町生まれであり、幕府の奥医師の家系の出身である。足利公園古墳群を調査した明治19年は、東京帝国大学の大学院在学中であり23歳であった。翌明治20年には埼玉県吉見百穴横穴の調査を行い、明治30年には東京都の芝丸山古墳群の調査も行っている。

坪井博士は、明治期にあつて考古学を推進した最も重要な研究者であり、明治22年から明治25年には欧州留学を果たし、帰朝後には東京帝国大学理学部人類学講座の教授として後進の指導に当たっている。

坪井正五郎は大正2年に露西亜に出張中にペテルブルグで亡くなっており、従三位勲二等に叙されている。

坪井博士の妻となった直子は箕作氏の出であり、美作出身の洋学者として著名な箕作阮甫の孫に当たる。直子の兄弟には帝国大学総長を務めた数学者の菊池大麓、動物学の箕作佳吉、歴史学の箕作元八など、いずれも帝国大学の教授を務めた俊英ぞろいである。

現在、坪井家の墓所は東京都・染井霊園に営まれており、祖父・坪井信道、父・信良、正五郎夫妻、坪井家の石塔が造立されている。

箕作本家の墓は、東京都・多磨霊園に営まれている。広い区画の中に阮甫・省吾・元老院議員を務めた男爵・麟祥などの個別の墓塔のほかに箕作家の石塔が建立されている。

かつて箕作秋坪、菊池大麓、箕作佳吉、箕作元八などの墓塔は東京都谷中霊園に営まれていたが、近年撤去された。

坪井博士の子供の誠太郎氏は、東大で鉾



坪井正五郎

山学を専攻された。誠太郎氏の子供の正道・直道の両氏は、平成18年11月に足利市で開催された、足利公園古墳発掘120周年記念シンポジウムに、ご夫妻で参加された。



坪井正五郎系図

足利公園古墳群は、足利の旧市街地を囲う西側を画する丘陵の先端に位置しており、足利の織物工業の盛行を背景として明治初頭の公園開設時に調査されたものである。

坪井正五郎の調査に先立って、地元の織物講習所役員であった峯岸政逸氏などにより1基の古墳が調査され、金銅装の馬具、多量の須恵器などの豊富な副葬品が出土している。

坪井正五郎は、明治19年の7～9月に2基の円墳を調査している。これは両毛鉄道敷設のために足利の視察に訪れ、古墳出土品の重要性を認識した帝国大学初代総長であった渡辺洪基の指示によるところである。

坪井博士の調査した古墳が1・2号墳であ

り、峯岸政逸氏などが調査した古墳が3号墳として報告されている。

坪井博士は我が国最初の学問的報告において、年代の根拠は専ら文献史料に求められた。古墳の上限年代としては、古墳から埴輪が出土することにより、埴輪の起源を載せる『日本書紀』の垂仁天皇32年の条に求められた。また古墳年代の下限については、出土遺物のうちの金環を服飾に関連するものとし

て、応神朝の漢衣導入以前に用いられたものとした。すなわち古墳の年代として、垂仁天皇から応神天皇の間の年代を推定したものである。

またこれら古墳には貴人が葬られ、副葬品を造った工人、古墳そのものを築造した力業者との貴賤の差異は明確であるとしている。

足利公園古墳群は、坪井博士の調査後100年以上を経過した平成2～4年の調査により、当時調査された古墳の確定が果たされている。

1号墳は古墳群の南東端の傾斜地に占地する径16mの小形古墳であり、河原石を用いた横穴式石室が現存している。2号墳は、1号墳の上部に立地した径22mの古墳であったが、完全に削平されて湮滅している。

調査ときに円墳とされた3号墳は、再調査の結果、全長34mを測る前方後円墳であることが明確になった。後円部には古墳の主軸に直交して割石を用いた両袖型の横穴式石室が現存している。

平成2～4年の調査により足利公園内に



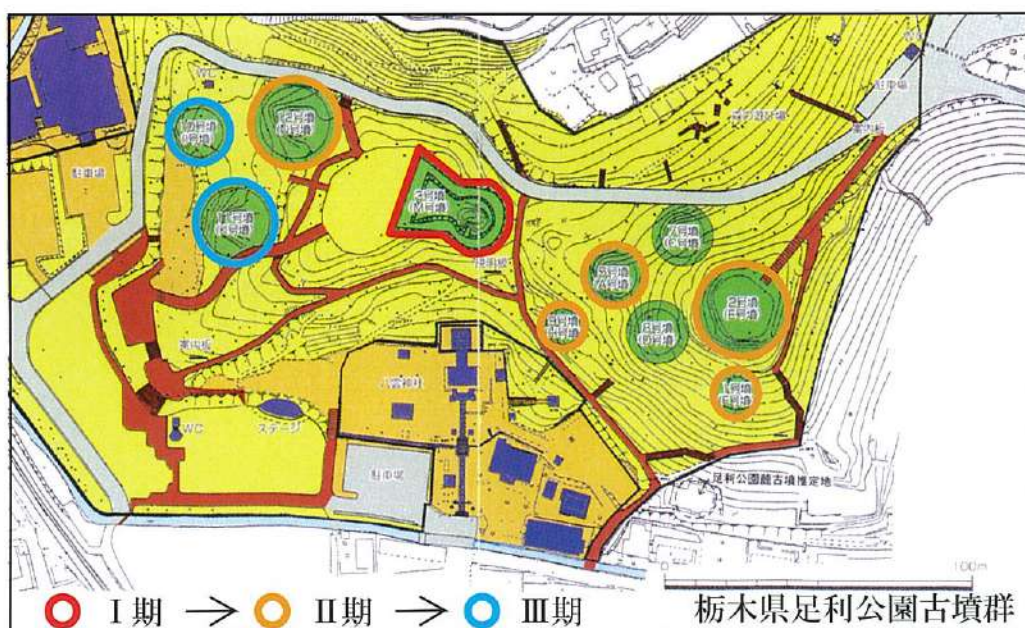
足利公園古墳発掘120周年記念シンポジウムにて(平成18年11月21日)

において確認できた古墳は、削平された2号墳を含めて10基である。これらは古墳群形成の端緒を担った前方後円墳の3号墳の南側に3基、北側に6基が分布する。

古墳の構築時期は、Ⅰ期・6世紀後半代～3号墳、Ⅱ期・6世紀末葉～1・5・9・12号墳、Ⅲ期・7世紀前半代～10・11号墳と報告されている。

この個別古墳の構築時期と古墳の分布を合わせ考えると、前方後円墳の3号墳と南側の3基を合わせた4基と、北側の6基に区分できる。前方後円墳を含む南側の単位群は相対的に墳丘規模が優っており、相対的な優位性を窺うことができる。南北の単位群ともに同時期に複数の古墳を構築したA2類型の単位群と考えられる。

足利の市街地を取り囲む丘陵上には約1000基の後期群集墳が展開している。一方、足利地域における在地首長墓は、足利市街地の東端部に展開した常見古墳群であり、6世紀後半代から7世紀初頭にかけて、前方後円墳の正善寺古墳→円墳の海老塚古墳→円墳の口明塚古墳と変遷しており、主体部であ



る横穴式石室は、両袖型式→胴張り石室→奥壁側が顕著な胴張り石室と変遷している。

この石室変遷は、足利公園古墳群でも確認されており、首長墓と管掌下にあった群集墳の埋葬施設が同様相を呈する点が、足利地域の最大の特徴として認識できる。

常見古墳群における前方後円墳の消滅は、東国各地における様相に比して1世代以上遡及する。早く前方後円墳が消滅する要因は、在地ではなく外部に要因が求められるところであり、これが故の圧倒的な群集墳の展開と考えることもできよう。

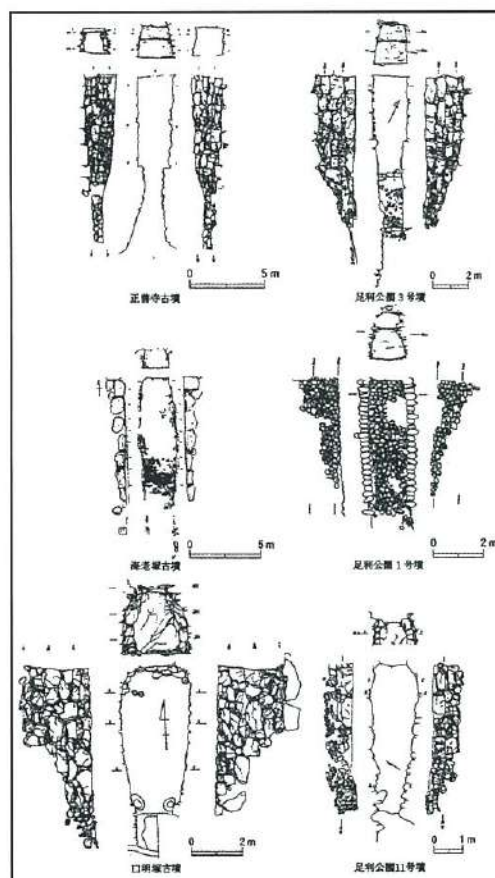
【参考文献】

市橋一郎「足利公園古墳群と坪井正五郎氏」

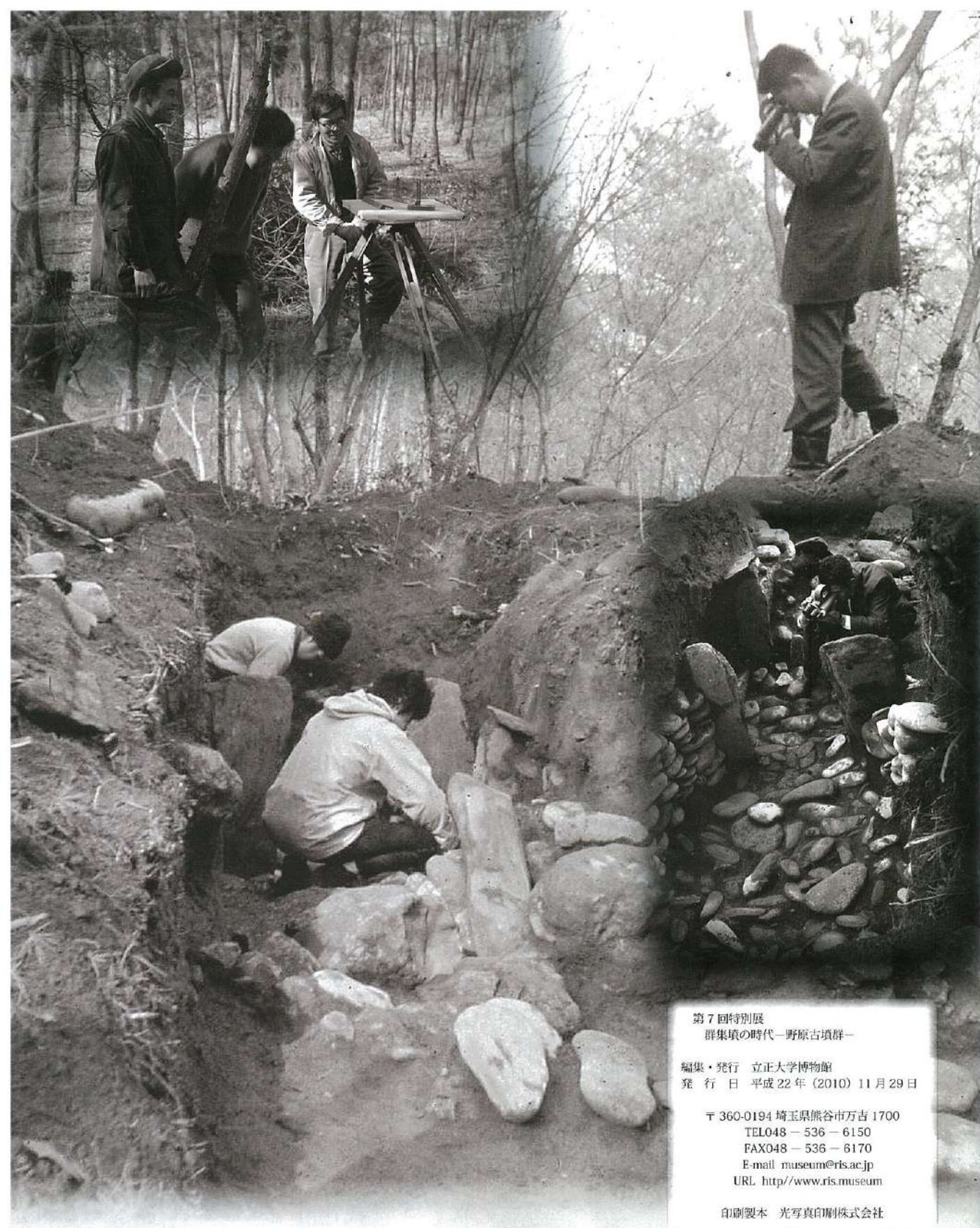
『唐沢考古』第15号 平成8年

大澤伸啓「後期群集墳の中の前方後円墳」『新世紀の考古学』平成15年

足立佳代『足利公園古墳と坪井正五郎』足利市教育委員会 平成18年



足利市石室編年図



第7回特別展
群集墳の時代—野原古墳群—

編集・発行 立正大学博物館
発行日 平成22年(2010)11月29日

〒360-0194 埼玉県熊谷市万古1700
TEL048-536-6150
FAX048-536-6170
E-mail museum@ris.ac.jp
URL <http://www.ris.museum>

印刷製本 光写真印刷株式会社

